

アンコール やまなみ塾 開校の経緯

中川 武

プロジェクト予備調査のために私(中川)が初めてアンコールを訪れたのが1992年10月でした。最初のうちは少人数でしたが、1994年8月の第4次調査には、日本からの専門家が15人ほど王立プノンペン芸大の研修生が3人、カンボジア人現地作業員が約50人ほどの大部隊の参加となりました。当時アンコール遺跡はアンコール保存事務所(ACO カンボジア政府文化芸術省の管轄)によって管理されていたので、その職員であったサオ・サム氏とチン・ドイ氏を JSA に派遣していただき、彼らと相談しながら作業員を集めることになったわけです。両氏ともポル・ポト派戦争以前より ACO に勤めており、内戦終了後、荒れ果てて人が踏み入れることもできなくなった遺跡の整備などを自分たちだけでやってきた、とのことで大変信頼できる人たちでした。

それで、両氏が居住していたアンコール・クラウ村の住人を中心にメンバーを集めていただくことになったわけです。アンコール・クラウ村は、アンコール・トムの北西に隣接する村で、古くからアンコール遺跡とは密接な関係を持っていた伝統が甦ったかのように、村人の参加者には熱意がありました。また、家族、親戚、近所の人々が多く自然な親しみの中ですぐに汗をかく仕事は楽しく、すぐに日本人専門家と村人との間に、現場で宴会をしたり、村での結婚式に呼ばれたり、といったいろんな交流が生まれました。

その結果現場に常駐した日本人長期専門家が帰国するときには、誰からともなく道や橋や集会所など、村づくりに協力したり、支援したりのつきあいが続いてきたのです。村と日本人専門家の間をうまく繋いでくれたのが、チア・ノル氏でした。遺跡保存修復のための技術は、その大切な部分が、親から子へと受け継がれる伝統技能であり、遺跡を大切にしたいという想いである。現在アンコール遺跡の第一線で働いている人たちの孫の代まで続いていけば、きっと本物の素晴らしい職人さんたちが育つでしょう。私たちの長いつきあいをしていきたいという願いがこのフリースクールに込められています。アンコールの祖先たちは、高いヒマラヤの遙か向こうからこの地にやってきたといわれています。木立に囲まれたこの場所からも青い空が見えます。その向こうに美しい山なみが見えるようになることを願っています。

